

小学生の読解力と論理的思考力を高める教授法・カリキュラム および教材の総合的開発

鈴木 樹 (児童学科・助教授)
高垣マユミ (児童学科・教授)
年森敦子 (家政保健学科・助教授)
柴村抄織 (児童学科・講師)
橋本吉貴 (児童学科・講師)

1. 研究の目的

近年の学力調査において、日本の子どもたちの学力低下が指摘されている。国際教育到達度評価学会 (IEA) 調査の結果からは、日本の子どもたちの学力の問題点として、特に、「読解力」と「論理的思考力」が低下していることが指摘されている。この2つの能力を育成していくためには、単に学習内容や授業時数を増やすだけでなく、学習内容の検討に加え、教授法・カリキュラム・教材の開発といった、多角的な視点から対策を講じていくことが必要であると考え

る。そこで、本研究では、本学初等部の児童を対象とし、初等部の教員と連携を図りながら、国語科と算数科の実践授業を通して、「読解力」と「論理的思考力」を高めるための教授法とカリキュラムの検討を行うとともに、教材 (学習支援ツール) を開発したいと考える。

具体的には、初等部の児童の「読解力」と「論理的思考力」を高めるために、国語科教育 (担当：柴村抄織)、算数科教育 (担当：橋本吉貴)、カリキュラム (担当：鈴木樹)、教授法 (担当：高垣マユミ)、教育学 (担当：年森敦子) の各研究分野の多角的な視点から、総合的に研究を行うことを目的とする。

2. 研究計画

以上の目的を達成するため、鎌倉女子大学初等部の児童を対象とし、今年度 (平成18年度) から研究を開始した。

年度および研究分野における研究計画は以下の通りである。

(1) 平成18年度

国語科の授業を通して、読解力を高める授業を検討し、実践する。具体的には、小学校4年生国語で新美南吉の「ごんぎつね」を題材として、平成19年2月に研究授業を実施し、「読む」という行為について種々の検討を行う予定である。

なお、締め切り日の関係上、この原稿を執筆しているのは平成19年1月であり、現時点では、研究授業をこれから実施することになる。

(2) 平成19年度

算数科の授業を通して、論理的思考力を高める授業を検討し、実践する。現行の学習指導要領に述べられている「算数的活動」を通して「活動の楽しさ」を実感しながら、論理的思考力を育成する。このようなねらいに基づき、視覚的効果による抽象物の具象化をねらったコンピュータグラフィックス（CG）教材の作成、パターンプロックやタングラム等の教材を開発し、図形領域から数領域に至る活用を検討する。

(3) 平成20年度

18年度および19年度に実践した国語科と算数科の授業を通して収集した全データを分析し、教授効果の検証を行う。また、本研究で得られた結果に基づき、初等部に対して、カリキュラム・教授法の具体的提言を行うとともに、開発した複数の教材（学習支援ツール）を総括してアーカイブ化し、蓄積する。

3. 研究経過と今後の方針

読解力や論理的思考力の研究を実施する場合、一般には国語や算数という各教科の中での検討や数時間の授業の分析ということになりがちである。しかし、教育課程（カリキュラム）研究の視点に立脚するならば、学校の教育活動全体の中で、各教科の教育実践をとらえることが必要である。

たとえば、初等部では漢字検定、算数・数学検定、英語検定、書写能力検定、校内パソコン検定など、各種検定を実施しており、このように、授業以外にも児童の学習に対する動機づけを高め、学力を高めるさまざまな教育活動が工夫されている。筆者らはこれらの全体像の中で、読解力や論理的思考力の育成をとらえる必要があると考えている。このため、初年度は学校を観察し、初等部長・鈴木洋先生をはじめ初等部の先生方に全面的にご協力をいただき、初等部教員に聞き取りを実施し、初等部の全体像をとらえるように努めてきた。このような視点を基礎にして、平成19年2月に実施予定の国語の研究授業を皮切りとし、今後、詳細な検討を行っていく予定である。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「小学生の読解力と論理的思考力を高める教授法・カリキュラムおよび教材の総合的開発」の平成18年度中間報告である。